

大川小校舎保存へ

石巻市長が方針、きょう会見

東日本大震災で被災した石巻市の大川小校舎について、亀山絃市長が校舎の全部を震災遺構として保存する方針を固めたことが25日、分かった。児童と教職員計84人が亡くなった大川小の校舎を残すことで、鎮魂の場とするとともに、震災の意義を後世に伝えることが重要だと判断したとみられる。26日に記者会見し、正式に公表する。

震災の鎮魂・伝承の遺構に

大川小をめぐっては、遺族の間でも「震災の記憶を風化させたくない」「校舎を見るのがつらい」と保存と解体の双方の意見があった。「もつと時間をかけて議論をするべきだ」との声もある。

亀山市長はこれまで「84人もの住民が亡くなった事実を、後世に伝える必要が

ある」と繰り返し語ってきた。3月末までに校舎の保存の是非について判断を下すことを示しており、校舎を遺構とする結論を出したとみられる。

一方で「保存と解体を求める両者が納得できるような解決策を見いだしたい」とも述べており、校舎は解体を求める遺族らにも配慮

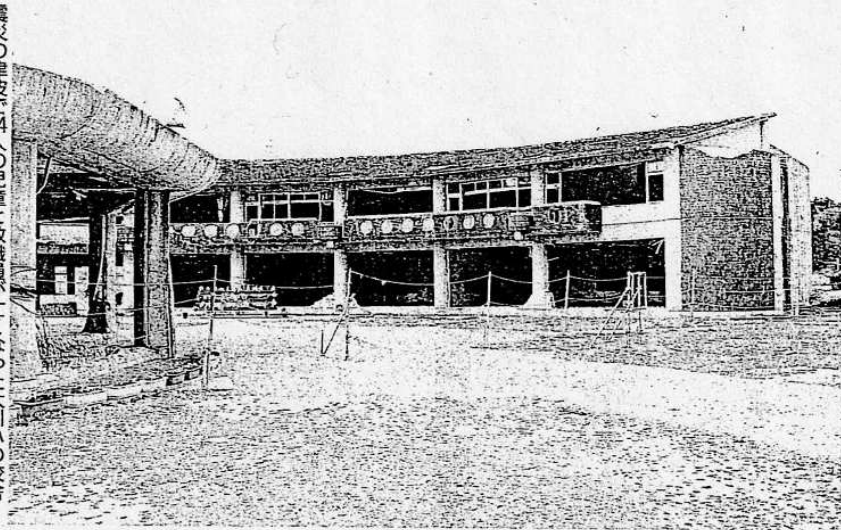
した形で保存する見込み。震災遺構の候補として挙げられていた旧門脇小校舎については、一部が部分的な

頑張ろう 石巻 3・11東日本大震災

保存とする見通し。保存場所については、現地で校舎の一部を保存するか、隣接地に整備される復興祈念公園内に校舎の一部を切り取った上で移設するか、調整しているとみられる。

復興庁は、被災自治体で1カ所の遺構に限り、保存の初期費用に復興交付金の充当を認めている。亀山市長は「両方の校舎を残す可能性もある」とも語っていた。

両校舎の保存をめぐる市は昨年、市民や地元住民を対象にアンケートを実施。「保存」と「解体」を求める意見はほぼ拮抗(きっこう)し、意見が割れていた。



震災の津波で84人の児童と教職員が亡くなった大川小の校舎